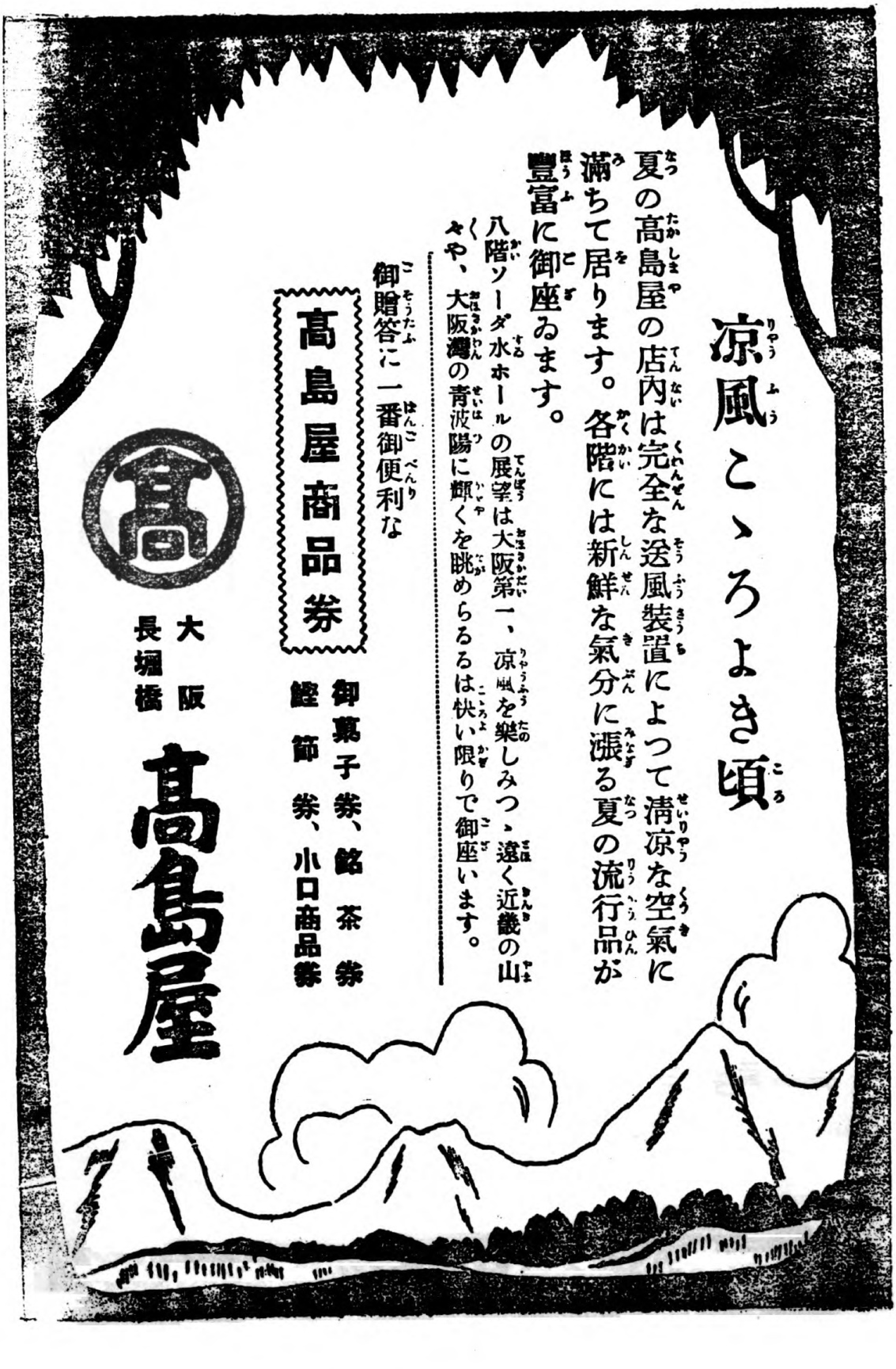
第四巻七月號

婦人運動



職業婦人社發行


涼風こゝろよき頃
夏の高島屋の店内は完全な送風裝置によつて清涼な空氣に滿ちて居ります。各階には新鮮な氣分に漲る夏の流行品が豐富に御座ゐます。
八階ソーダ水ホールの展望は大阪第一、涼風を樂しみつゝ遠く近畿の山々や、大阪灣の青波陽に輝くを眺めらるるは快い限りで御座います。
御贈答に一番御便利な
高島屋商品券
御菓子券、銘茶券
鰹節券、小口商品券
大阪
長堀橋
高島屋

婦人運動

七月號

目次

巻頭雜記

重苦しいまでに青葉が深くなつて來ました。毎年青葉病とでもいふものに犯されつゞけて來た私は、今年だけは青葉の憂鬱にまけまいと、力んでゐます。それには、何か定まつた仕事をもつて絶えず心に張りをつけたらよいかと、一つは自分のために此の雜誌の仕事を手傳はせてもらふ事にしましたが、さて何の役に立ちませうか。

◇

長い間人生の裏町に、臺所と子供にのみ我を忘れて働いて來た自分であることを今更ながら感じます。

目をあけてみて驚くことは此の頃の個性の實にいき〳〵と自由な生活態度、かゝはりのない生活觀社會觀、そしてそれ等のあまりに自分と遠いものであるのを悲しく思ひます。

◇

しかしたゞに悲しいとだけ思つてゐるつもりはありません。これから私もおくれ馳せながらひとつゞしつかりと自分自身の道を、仕事を、つかんで行きたいと思つてゐます。

◇

新らしい社會觀生活觀が若い個性の間に生れてゐるとは言へそれは未だ未だ多くの試練研究を經なければならないものであることは申すまでもありません。

しかも私達は其爲には一面に於て多くの無理解な因襲と戰はねばなりません。

さうした大きな、そしてほんとうに強い意志を要する仕事が私のやうなものにやり了ほせるかどうか、心細い氣もしないではありません。

しかし皆樣の御指導によつて是非とも精進したいつもりで御座います。

◇

扨てこのやうな決心でかゝりはしたものゝ、締切間際になつて奥氏が關西の方へ、よんどころない用事とは言へ、旅行されたのにはすつかり面喰つてしまひました。

何しろ編輯のこと何も知らないのでどこをどうして、いゝのかすつかり間誤付きました。間誤ついた上で出來あがつたのがこのとほりのものです。皆樣にほんとうにすまないと思つてゐます。しかしそのうちには樣子もわかりますから、それまでどうか長い目で見てゐて下さい。

（伊福部とし子）

× × ×

▼誌代はすべて前納にして下さい

前納誌代

壹部 貳拾五錢（郵税五厘）
半年分 壹圓四拾錢
壹年分 貳圓八拾錢

送金法

誌代は必ず前金の事
送金は振替が一番便利です
誌代の受取證は別に出しません
雜誌發送を以てこれに代へます

大正十五年五月廿八日印刷納本
大正十五年七月一日發行

發行編輯兼印刷者 奥むめお
東京市外蒲田町女塚二四七番地

印刷所 京濱印刷所
東京府蒲田町北蒲田六九五番地

發行所 職業婦人社
東京市外蒲田町女塚二四七番地
振替東京六四〇一六番

巻頭言

或書物の報ずる處に依れば、三菱家の投資總額を合はせると二億四千萬圓になるさうである。さうしてその各會社の最近の配當は、一ヶ年約壹千五百萬圓に達してゐるとか、之はすべて事業費の一切を支拂つて、本當の純益金として資本家の手に落ちる金である。即ちその中から税金を差引くと、あとは全部岩崎一家の勝手に使ふ事の出來る金である。

一年壹千五百萬圓、月當百貳拾五萬圓、一日當り約四萬壹千六百五拾圓、これを勞働者の平均賃銀(大正十年末調査)一ヶ月七拾七圓に比べて見ると、ざつと壹萬六千五百倍に當つてゐる。職業婦人の平均賃銀を大ざつぱに勞働者の半額一ヶ月參拾八圓五拾錢とすると三萬三千倍になるわけである。

つまり勞働者が壹萬六千五百年の間、職業婦人ならば三萬三千年の間、呑まず食はずで働けば、岩崎家一年分の收入だけ殘るわけである。

稼ぐに追ひ付く貧乏なしと云ふ格言は、私達が小學時代からよく聞いてゐる事であるが、そんなに永く呑まず食はずで稼げる方法が修身の本にも、先生の言葉にも、なかつたのは遺憾な事である。

時評

奥むめお

全國女教員大會所感

今年は例年に比べて若い人が大分多いやうだといふことであつた。二三年來女教員大會のある頃にはいつても地方講演に出かけてゐて、傍聽に出かける折がなかつたのであるが今度は都合よく機會を掴むことが出來た。私が傍聽をしたのは第二日である。第一日も第三日も、

女教員の部分勤務制の議案で大分論戰に火花が飛んだ。といふことであつたが、惜しいことにさし迫つた用事に妨げられて行けなかつた。第二日の議案は、

第二號議案、有爲なる小學校女教員を養成する方法如何、

第三號議案、小學校女教員をして教育上有効なる活動をなさしむる方法如何、

第五號議案、農村振興上女教員の努むべき事項如何、

といふ風なものであつた。

今度女教員大會で先づ一番に感じられたことは、不用意に論じあつてゐる言葉のはしばしにも、傍聽してゐる者にはハッキリとそこに新時代の片影を見るといふことである。殆んど無意識的にではあるが、一つの議案に就いて各自が云ひ合つてゐるその言葉の中にも、多く——就中年若い人達が云はうとして、何と云つていゝか、思ふことがすつぽりと云ひ得ないと云つた風の或もどかしさを露骨に示してゐるあたりに、そこですよ…と云つて代つて辯じてあげたいと思ふやうな場合さへ尠くなかつたやうである。

第二號議案の場合に、有爲なる女教員を養成するに就いて（ハ）專心學業にいそしみ得る環境にあるもの、といふ個處で、元氣らしい若い人が立上つて、

「それでは、どんなに頭がよくつても、そして將來小學校の教員として立つて行くことに非常な興味と熱をもつてゐる子供でも、さういふ子供にいくらでもあり得ると思ふのですが、貧乏人の子供は結局先生になる勉強は許されないといふのですか」

と反問したとき、委員長が言下に答へて

「さうです。かう云つては失禮にあたるかも知れないけれども、子供の

内から貧しい中で育てられた子供は人格的にいろんな欠陥をもつてゐる」云々と、洽々數百言を費して、專心學業にいそしみ得る環境にある者が必要であることを特に貧富に依る環境から說明しやうとしてゐたのはよく所謂下情に通ずるのには小學校の教員をしてみるのが一番いゝと考へてゐる私には、この人だつていろんな階級の子供に接してゐるのであらうにと、なまじいに筋道の立つた頭のよさゝうな說明振りであつただけに一層がつかりした。

農村振興問題に就いても、委員會の調査報告の中に、

（一）思想の善導並びに信仰に關する事項、

1　農村婦女の使命と責任を自覺せしめること、

2　社會共同聯帶の思想を助長すること、

3　都會生活の眞相を知らしめ、意味なき憧憬に陥らしめず、且つ農村生活の趣味を鼓吹し、農村愛好の念を涵養すること、

4　正しき信仰心を助長すること

5　その他農村婦女子の思想善導に努めること、

（二）美風良俗に關する事項

1　質實純朴にして勤勞を尙び土の香に親しむの良風助長に努めること、

2　勤勉貯蓄を奬勵すること、

3　その他弊風矯正、美風良俗の助成につとめること、

（三）趣味娯樂に關する事項、

1　讀書、音樂、劇、手藝、生花茶の湯運動その他農村婦女子に適切なるものを奬勵し、その趣味娯樂の向上改善を計ること、

（五）運動を奬勵し體育の向上を計ること、　　（以下略）

この報告書全体を通じて隨分變なものだと考へざるを得ないものが多いが年若い人達が代る〲立上つて要處々々を指摘しては、一体どの程度に現在の農村の婦女子の實生活を知つて委員諸氏はかういふものを作られたのかと肉迫するあたり、全くしつかり、と聲援したいほどであつた。會全体の空氣として、尙ほ、最もらしい條理ある云ひまはし方をする者には、たとへその內容がとても時代錯誤だと思はれるやうな場合にも敬意と贊意をつき混ぜたやうな拍手が出るのに反して、實際問題に觸れた所謂實感からほとばしり出たやうな抗議や質問やが、ザワ〲と笑殺され了る場合が少なくなかつたのは傍觀者にとつてわけていら〲しい事であつた。

專心學業にいそしみ得る環境にあるものゝ問題や、農村婦女子の問題や、初任給の問題などが、ほんに際どい處で診正可決になつた事などはせめてもの今年度大會の誇るべき成

積であつたのであらう。

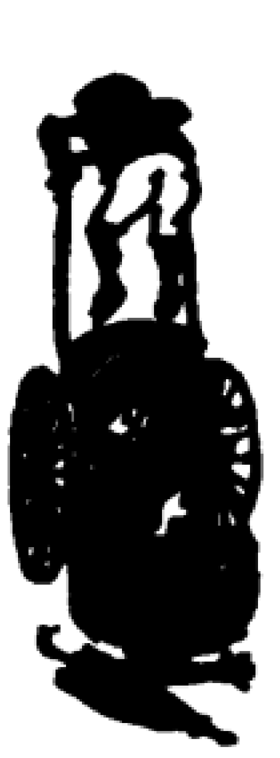
要するに、女教員全体として社會問題に對する理解が非常に足りないやうに思はれた。近年に於ける我社會生活の激しい變化は、女の生活態度をも一變させずにはおかない。今の社會に於ける貧富に依る階級的な甚だしい差別、又男女に依るこれも殆んど階級的な地位の優劣と機會の不均等は社會問題としての婦人問題解決の要を事毎に私たちに教へてくれる、切に女教員諸氏がもつとつきつめてその生活を凝視することゝ一般社會問題の書を讀んで現代に生きるものに欠く事の出來ない心の糧を貯へられんことをおすゝめしたい。

國際的に批難の的となつた女工の夜業問題

勞働總同盟の婦人部が、紡績女工の夜業禁止案のために今年の議會に請願運動をしたことはいろんな意味で社會に大きな反響を與へた。最近のわが婦人運動が、廢娼、婦人參政權、女子教育、生活改善等いろ〳〵の大きな問題がある中で、婦人勞働者、職業婦人保護の問題が主要な題目となつて來つゝあることは、爭はれぬ傾向である。

去る二日のゼネヴア電報は、國際勞働會議で日本の婦人勞働者の夜業が、問題になつてわが政府代表や資本家代表が苦しい應戰をしたことを傳へてゐる。即ち、イギリスの勞働代表マーガレット、ボンドフキールト女史（前代議士で勞働内閣のとき勞働省の政務次官であつた婦人）は東洋の婦人勞働者のために大いに論じてその勞働條件は、堪へざるものであることを指摘し、中でも支那は最惡で日本はこれに次ぐ惡さである

日本は須く婦人勞働者の夜業禁止條約を批准すべし、と要求したといふ。次いで印度の資本代表も、日本が引續いて婦人勞働者に夜業をさせてゐることを非難し、歐州でもアメリカでも、又イギリスの海外領でも今や婦人の夜業は殆んど事實上廢止されてゐるのに鑑みて文明國として尚ほこれを存續してゐるたゞ一つの國である日本も、直ちにこれを禁止すべきであると述べたといふ。何れこれはもつと輿論を高めるに違ひないと考へられるが、この問題については本號で内務省の北岡氏も詳述して下さる筈であるし、國際勞働協會婦人部として、七月に入つてから、各紡績工場の實地調査に出かける豫定になつてゐるから、そのとき新らしい材料を得て八月號あたりに再び女工の生活の實際について何か書いて見たいと思ふ。



衆目を集めし羽衣娼妓解放事件

星　かつゑ

高岡市羽衣遊廓鳥屋の當主島田澤太郎（十二歳）後見人島田喜太郎氏夫婦が今春死去せられたる清太郎養父母の供養の爲め、十一名の抱藝娼妓を自由解放せんとて去五月二十七日右十一名の者を集め前借金合計八千六百貳拾圓也を張消しとして解放する旨發表した

島田氏の御話では、最初は唯前借金を張消しにしてやるのであるから解放さへすれば極簡單に處理がすむやうに考へられたさうですが、發表された後續々ご毎日全國各地から送つて下さる感謝狀に、大低は將來彼女たちの行先安全ならしむるやうにとか、必ず再び元の道に戻らぬ樣に注意してくれとかと、色々と解放された後の彼等の身の始末に付て希望やら御注意やらがあつたさうであります。其爲め島田さんは「非常に今後の彼の女等の身のおちつけ處が大切だ、それがあやまられるなら今自分の與へた解放の目的が無になつてしまふわけてある事を思ひ、解放後も彼等の行先を定むるに大に責任のある事を感じましたとの事でした。其時十一名の內樓主以外の他の商店に買ひ掛りの借金を有する者四名あり其額合計五百圓程の由、尙ほ三名は身の振り方大低定まつて居りましたがあと八名は何とも定まつて居りませんでした此外借金を持つて居る者は容易に保護者から拂つて貰はれさうにもなく迎ひに來る旅費すら無き者もあるらしいので、本人等は何をするにも力もなく、嫁入するにも身の仕度何もなし、何れの方面を考へても其借金を返しておちつき得る處がない爲め、結局元の道に逆戻りするより外道なき樣に考へつゝある者さへあるやうに聞きました、尙ほ全國各地から島田氏へ送られた感謝狀は貳百餘通に達して居りました事、其他色々詳しき御事情を承はりました

その後島田氏から、彼女たちの借金の事に付て婦風會で何ごか御心配が願はれるであらうか、叉婦人ホームなどへ御願ひいたす場合はどうして頂けるであらうか、二人程御願ひいたすでせうこいふ事、叉極く貧しい親許から不思議な旅費を送つてよこした爲め或ひは轉賣の道をつけて引戻す方法をとつたらしいから、それに付ても本部こ打合せしておいてほしい云々といふ樣な事其他外借金を一人で貳百五十圓、百三十圓持つて居る者もあり、それらの行先きが最も案ぜられるなど數回の電話を聞きました其後十二歲の娘一人が同人祖母に伴はれて歸り行きし事三名だけ　（外借金を持てるものゝみ）が其九日夜八時半高岡發上野行急行列車で父兄ご共に歸鄕する旨御知らせ頂きましたので、先づ高岡に電話をかけまして外借金を如何にして立つか、誰

（二七頁へつゞく）

工場法の改正と女工の保護

北岡壽逸

本年七月一日から工場法が改正せられる事となりましたが、其の結果女工の勞働狀態がどれ程よくなるのか、其の概要を申上げ度いのでありますが、其の前に日本の工場法と女工との關係を一言申上げます。

日本の工場法に於ては就業時間の制限、夜業の禁止、休日休憩と云ふやうな就業の制限は女工と年少者とに限られて居ます。且日本の工場に働く職工の大部分は女子であります。改正工場法の適用を受くる工場に働く職工は約百六十五萬あるのですが、其の中約九十萬餘が女子で、全職工の六割五分を占めて居ます。從つて日本の工場法は女工の保護を主たる目的とするもので、又女工を保護することが日本では一番重要な事柄であります。女工の保護は職工の過半を保護する所以なるのみならず、女工の勞働時間の短縮、休日の設置の爲め、男工の就業時間も短くなり、休日も設けられる結果となつて、つまり男工は女工に均霑する事となるのであります。以下主として女工の立場から改正工場法の下に勞働狀態が如何に變るかの大略を説明致します。

一、就業時間の短縮、　改正工場法の施行せられる其の日（本年七月一日）から全國に亘つて就業時間が一時間短縮せられます。從來は十二時間就業を原則として居たのが十一時間就業となります。（尤も既に十一時間又はそれ以下であつたものは舊の儘に据置かるゝも知れません）尚十一時間就業の原則には多少の例外があります。製糸業及輸出絹織物業は今後五年間は十二時間迄の延長を認められて居ます。然し是等は從來十三時間迄認められて居たのですから、やはり一時間の短縮です。紡績業は夜業を廢するならば今後五年間十三時間迄認められます。夜業やる以上は他の業務と同樣十一時間です。

就業時間の中には一時間の休憩時間を含んで居ます。休憩時間中には機械の運轉を留めて、工場の外に出て眞正の休憩をとらせるのが工場法の精神ですが法に明白に規定のない爲從來は機械は留めず職工が代る〳〵休憩をすると云ふ樣な工場もありました。そう云ふ小工場ではやゝもすれば休憩は名ばかりで休憩時間にも働く女工が少くないのです。改正法では休憩は全員一齊にやることゝなりましたから必ず機械を留めて眞實の休憩を與へる事となりました。我國の就業時間は一時間の休憩を含んで居ますから、實際の勞働時間は改正法の下には原則十時間（製糸業、輸出絹織物及晝業のみの紡績業は十一時間）であります。外國に於ける勞働時間と云ふのは休憩を含みません。

それにしても八時間勞働の提唱せられてから數年經つてやつと婦人の十時間勞働を規定するなど隨分遲れて居るやうですが、それでも工場法の施行前は十六時間位が普通でありました。而も休憩は五分間位の食事時間の外には眞實の休憩と云ふものはありませんでした。改正工場法を此の時代の實際に比すると製糸工場に於ては五時間、織物工場では六時間の就業時間の短縮であります。斯くの如く就業時間短縮の結果我國の工場の衛生狀態は十年前に比すると隨分良くなつて疾病率、死亡率等に良好な成績を示して居ます。

二、適用範圍の擴張、　從來工場法は常時十五人以上の職工を使用する工場のみに適用せられて居ましたが、改正法では十人以上の工場に適用せられる事となりました。職

工十人乃至十五人位を使用して居るのは特に織物工塲に多く、これは勞働時間が非常に長いのを常としたのですから七月一日改正法の施行に依りて面目を一新するに到りませう。然し未だ十人未滿の工塲には工塲法が適用せられず、是等は今尙一日十四、五時間位の就業時間が行はれて居ます。而も織物工塲では工塲法の適用のない小工塲と、工塲法の適用のある大中の工塲とが相交つて居て自覺のない女工達は些少の賃金に釣られて、就業時間の長い小工塲に行く事のある爲め、やゝもすれば工塲法の違反が行はれます。一体織物及製糸等の纖維工塲に於ける女工の就業時間が何故に特に長いかと云へば、我國女子の從順な事、女子勞働が一時的勞働で長い將來の事を考へぬこと、女子が淺慮にして些々たる一時の賃銀に釣られる事等を擧げる事が出來ますが、一番根本的なる事は作業の性質が力作を要せず著しき疲勞を覺ゑないのと、殆んど凡て稼高拂賃銀制度で女工は賃銀の一錢でも高いを望み且は同僚との競爭心を巧に利用せられて肉を削り、骨をそぎつゝ無理なる勞働を爲すのであります。今後少くとも織物業にありては一切の工塲に工塲法を適用する事は極めて必要でありますが同時に女工としても一時の些少の賃銀のみに釣られず同僚との愚なる競爭を止めて、正當の時間以上の勞働には之を拒むと云ふ習慣をつけなければなりません。

三、夜業の禁止、　晝働き夜眠ると云ふのは人の常態であります。然るに近代文明の結果たる機械生產は夜をも働かせ樣とします。誠に無產なる勞働階級は、近代物質文明の恩惠を受くる事少きのみか、其の呪ひを受けて居る事を感ぜずには居られません。夜業の如何に体に有害なるかは今玆に說く迄もなく、曾て農商務省の調査に依るに紡績女工は一週間の夜業に數百匁の體重を失ふ。

次の晝業の一週間に於て幾分回復するけれども尙百數十匁は之を回復することを得ず、肉瘦せ体衰へて數ヶ月にして工塲を去るのを通例としました。尤も其の後工塲の設備もよくなり、休憩も行はれ月四回の休日も置かれ、又最近では就業時間の短縮も行はれましたから（實働十時間迄）之を往時に比して有害の程度少きは云ふ迄もありません。けれども然し兎に角不完全な日本住宅で一室に十數人も居て

晝間充分の睡眠を取ると云ふことは望み得べき事ではありません。私は工場を臨檢する時大低寄宿舍をも見ますが夜業班の晝間に於ける睡眠狀態を見ると一室の者が全部眠つて居たのを殆んど見た事はありません。必ず誰か一二人は眼を覺して床の上に轉々して居ます。昨夜徹宵勞働に服し今夜又十二時間の徹宵勞働をする身で晝充分眠られない人を見ると其の身体に及ぼす疲勞從つて來るべき疾病を思ふて常に暗涙を呑まざるを得ません。今度の改正工場法は夜業の禁止を實行しましたがそれでも尙三年の猶豫期間があります。尙三年も徹夜業と云ふ苦しい勞働に服して戴かねばならない事は實に堪へ難いことですけれど、夜業禁止の結果は生産が、ずつと減りますので之に應じて工場の設備を增加しなければならず、日本では紡績工場の設備の增加には計畫より完成迄にどうしても三年は要するので其の期間丈は猶豫する必要があるのであります。然らざれば綿糸の生産が減つて價格が無暗に上つたり輸出が衰へたり致します。

四、幼年者の就業禁止、　從來の工場法では原則として十二歲以上ならば工場に使つてもよい、或種の業務では十歲以上の者は使へる事となつて居りました。改正法では尋常小學校を終了した者、又は十四歲以上のものでなければ工場に使へない事となつて居ます。幼年者の使用と云ふのは貧困の爲め已むを得ないのもありますが、多くは父兄が工業主又は募集人から賴まれて、或ひは少しの前貸金に釣られて娘を工場にやると云ふやうな事情のものであります而も身心未熟の時代に工場勞働に服する結果充分の發育を見るに至らない例が多々あります。今度の改正法の結果は眞に貧困で小供の稼ぎでもなければ糊口に窮するやうな家にとつては、多少困る點もあるかも知れませんが、大体に於て幼年勞働と云ふ大弊害が除かれる事は我國多數の勞働階級の爲めには大慶に存ずる次第であります。

五、扶助料の引上、業務上の負傷又は病氣に對しては工業主に於て扶助するを要する事になつて居ますが、其の扶助料は今度ずつと引上げらるゝ事となりました。扶助料には種々の種類がありますが、分ち述べると左の通りであります。

（一）療養の扶助、業務の爲めに怪我したり、病氣になつた時は工業主が治療代の全部を支拂ひます。

（二）休養扶助料　業務の爲めに怪我し又は病氣になつて仕事が出來ない時は賃銀の六割の手當がもらへます。尤も休業が永引いて半年を超へると賃銀の四割となります。

（三）障害扶助料、病氣が治療した後に於て身体に障害があつた場合は障害の程度に從つて夫々左の如き扶助料がもらへます。これは今度の改正に依つて隨分增額されましたから左に舊規定に依るものと新規定に依るものと對照します。

	從來	改正法
（イ）終身自用を辨ずる能はざるもの	賃銀百七十日分以上	賃銀五百四十日分
（ロ）終身勞務に服する能はざるもの	賃銀百五十日分以上	賃銀三百六十日分
（ハ）從來の勞務に服する能はざるもの 健康舊に服する能はざるもの 女子の外貌に醜痕を殘したるもの	賃銀百日分以上	賃銀百八十日分以上
（ニ）舊に服せざるも從來の勞務に服することを得るもの	賃銀三十日分以上	賃銀四十日分以上

（四）遺族扶助料、病氣又は怪我が不幸にして治癒せずそれが爲め死亡したる時は賃銀三百六十日分以上の扶助料（從來は百七十日分以上の扶助料でした）と、賃銀二十日分以上の葬祭料（賃銀二十日分が二十圓未滿なる時は二十圓）が貰へます。（葬祭料は從來は十圓でした）

（五）打切扶助料、療養扶助料、休業扶助料は負傷又は疾病の續く限りもらへる譯ですが、療養開始後三年を經ても未だ治癒しない場合には打切扶助料を給して以後一切の扶助の義務に代へる事があります。打切扶助料は從來は賃銀百七十日分以上ごありましたが改正法では賃銀五百四十日分以上となりました。

（六）產前、產後の休業、女工は產前四週間、產後六週間は休業する權利があります。此の期間は賃銀を拂ふか拂はないかは工業主の任意ですが、來年一月一日からは健康保險法に依つて賃銀の六割は支給せらるゝ筈になつて居ます。尙產前の休業は本人から申出なければなりません。

出産日などは他人から指す譯に行かぬからであります。産後の休業は本人の申告の有無に關しないのでありますが、四週日を過ぎて本人が出勤し度いと思ふ時は醫者の診斷を受けて差支無しと認めらるゝ業務に就けることゝなつて居ます。

（七） 解雇手當、解雇の日をはつきり決めない場合、雇主側から解雇するには雇主は二週間前に豫告をなすか、又は二週間分の賃銀を手當として支給する必要があります。これも改正工場法で新たに規定せられました。

八、賃銀及貯金

賃銀は少くとも一回現金で支拂はる筈であります。又仕事を止めて歸る時には全部拂ふ筈です。尤も貯金として雇主に預けて置く事は職工の任意でありますが、仕事を止めて歸る時、一ケ月以上歸鄕する時、結婚又は葬式の費用に充つる時、其の他必要あつて請求する場合には何時にでも拂ふ筈になつて居ます。若し歸鄕の場合又は仕事をやめて歸る時其の他解雇の場合等に「來年又來たら其の時賃銀や貯金を拂つてやる」とか「賃銀は工場に歸つてから拂ふ」とか「契約通り居なかつたから貯金を拂はない」などゝ云つて賃銀や貯金を支拂はなければそれは工場法の違反になります。

九、募集に應じて來たものに對する保護、募集に應じて來た女工達には募集取締規則による種々の保護があります。第一に募集する場合には募集從事者は就業案內を示して工場に於ける就業時間や賃金の事など詳しく話す筈になつて居ます。而して就業案內にある所と異つた時、又は病氣其の他已むを得ざる事由ある時は何時でも鄕里に歸れます。此の場合には工業主方で旅費及看護の心配一切をやる筈です。募集從事人が工場に來る途中又は工場內に於て不埒な振舞のあつた時は處罰さるゝは勿論、將來募集從事者たるを得ない事になつて居ます。

十、與借金、外出の自由、從業前借金のある女工には中々外出を許さない工場もありましたが、これは工場法を待たずとも當然刑法上の犯罪になります。借金は借金、外出は外出で、全然別であります。借金があつても業務に支障なき限り即ち休日とか仕事の終りてからは自由に外出する

ことが出來ます。

以上改正工場法其の他の女工の保護法に關して概要說明致しましたが、以上は何れも制裁付の强制法規である上、工場勞働者の保護の爲めに特に各府縣(東京市では警視廳)には工場監督官と云ふ役人が配置されてありますから、萬一工業主が以上の法規を犯した場合手紙か葉書で工場監督官に訴へれば何時でも保護を得られます。

長野縣工場課には勞資相談所があつて賃金や貯金の不拂、檢番や、工業主の不埒なる行爲、前貸金のこと其の他工場法に關すると否とを問はず種々女工の爲に相談相手となつて保護と世話とをして下さいます。其の他の府縣では別段斯かる相談所はなくとも工場監督官は工場勞働者の保護を任とするものですから何でも訴へれば種々面倒を見て下さいます。

以上の外來年一月一日から健康保險法が施行せられて、業務の外の病氣でも治療をし、又休業中は賃金の六割を給する事になつて居ます。

一体現代は文明が進步したとか、日本は一等國だとか申しますが社會の根本を培ふ生產事業に從事して居らるゝ勞働者の實情を見ると、何處に文明があるのか何が一等國だと云ひたくなる樣な狀態で、文明の恩澤も社會の一方に偏し、一等國も表面丈と云ふ氣が致します。社會局では斯かる不公平なる狀態を除き文明の恩澤に洩るゝものなき樣勞働者の保護向上を計つて居ります。日本のやうな自然の豊源に惠まれない國では俄に歐州並の勞働狀態に迄引上げる事は困難ですが、我國の社會で出來る丈漸次にやるはずです。法律を以て全國的にやる仕事ですから到底痒い所に手の届く樣な施設も出來ませんが、漸次時勢の進運に應じ勞働者の保護を計るはずであります。



女教員大會を聽く



金子しげり

A「今年も女教員大會に傍聽にいらしたさうですね。」

B「えゝ、あの會が東京の婦人界の年中行事になつてしまつたと同時に、私の年中行事にもなりましたよ。今年で四年ほど續けて聽きに行きます。」

A「今度が何回目なのでせう。」

B「六回目ですよ。何しろ今年は會員が六百近くもあり。臺灣、樺太、朝鮮などからの出席者もあつて殊に若い人が多かつたせいか、素晴しく元氣な會でしたよ。」

A「年々進歩の痕が著しく見えますかね。」

B「ねゝあの會位それがよく分る會は一寸ないやうに思つて、ひどく興味を持つて聽きに行きますがね。何しろ先生樣なのだから、實に言葉を深山知つてゐますから、議論になると甲論乙駁それが實に丁寧に、何といつても相手を自分の思ひ通りに教育せずには居られないこいつた譯で大變なのです。それりやこても見物ですよ。」

A「議事など、中々美事ですつてね。」

B「えゝ。頼もしいと思ひますよ。聽いてゐて」

特に今年は何が面白かつたんですか。」

B「九つの議案の内帝國教育會から提出した『部分勤務制を設くるの可否』といふのが、一番やかましかつたのです。つまり有夫の女教員が普通の勤務をしては、母こしての務と教員としての努が兩立しかねるから、さういふ特殊の立場にあるものゝ爲に、時間的にも學課的にも部分勤務の道を開かうといふのだつたのです。

所がこれは主に政府委員側が提出したので懸命に支持してごうしても可決通過させやうと意氣込む一方、どえらい反對の火の手が上つて、議場が沸騰したのです。」

A「それは」

B「反對論は、そんな虫の好いつまり子持ちなら午前中だけで歸るとか、事務はやらないなど〻虫の好い案を出しては、まだ〳〵確立した地歩を社會的に有つてゐない女教員こいふものが根本的に危い。といふかなり女權的な立場から來たものと、元來國民教育に任ずるものが、子持だからこ弱音を吐かずに二重の荷を負はねばならぬと力說する教育心酔論者の二つが主でした。

　そしてそれらがたう〳〵勝を制して留保こいふ事で來年まで持ち越す事になりましたがね、實にまなじりを決しての論戰に火花を散らした事でした。第三者として聞いてゐるこ、反對論者が特殊なるものに對する案である事を忘れて、一婦論にして大袈裟に反對してゐるのが業々しくて的を外れてゐる氣がしましたが、女權論的の反對論は一番面白かつたんです。」

A「職業意識に自覺して來たんでせうか。」

B「それもいへますね。何しろ今年が一番さういふものが判然こして來てゐたと思ひます。有爲な教員を作るにはこの問題の中でも、いつもなら、まるで抽象論で、教育者專用の字引から拔いて來た、文字の羅列なのに、今年ははつきりこ、待遇問題など出てゐました。そして委員會の調査案が、俸給の性別による差を示すのに最高級を出してゐたのに對して、若い一人が實に美事な理論的な論鋒で、最低賃金即ち初任級の差別徹廢を叫び通して修正可決させたのは立派でしたよ。

　一般に若い人たちがはつきりと物をいつてゐるのがめだちました。理論が欠け易い中年者と對峙して堂々と勝を制してゆくのが美事でした。一体國民教育といふ幽靈にとつ〻かれたやうな中年の硬化した女教員は私共にはやり切れない感じがします。」

A「農村問題が論じられたやうですね

B「ゑ〻、農村振興上、女教員のなすべき事項こいふものを相談したのですが農村の娘たちを、茶の湯や生花で思想善導をやるのが大體の意嚮でしたけれど、これにも若い人々が力戰して、委員會の案を一蹴しやうといふ氣勢を頼もしくも見せてくれました」

A「地方的に結束してゐますか。」

B「いゝえ。殆んどさうでない、若い人々は淺間の人でも奈良の人でも共鳴しあつてゐるやうに質的に殆んどつい

てゆくやうでした。ですから、數を度外視察なり議場では、まだ戰術をしらない若い人々のよい考へは埋れるより他はないのですが、そこに一番未來の希望を認めましたねえ。」

A「議長はいつでも男なのですね。」

B「女教員の會といつても、正直にいへば、帝國教育會主催全國小學校女教員會なのですから、全ての權力を主催者が振つて居り、その側に立つ政府委員格の女教員が少數あつて議題の事など相談して決めるやうですが、本來ならそれは、女教員自分たちの會でやらなくつてはならないものです。その證據に獨立してゐないばかりに肝心の點で、會員の意志より主催者側の意志が通されるやうな、第三者から見ると橫暴な事實を毎年の拜見します。從つて毎年種々決議してもしつ放しで、實行が伴はない爲に、力が出て來ません。」

A「女教員自身の會があつて雜誌も出してゐるのではないですか。えゝ全國小學校聯合女教員會といふのがこの會から一昨年生れ去年から機關紙小學校女教員を出してゐます。これが本質的な小學校女教員の團結でせうが、まだ生れたてゞさう大した力を有てずにゐるやうです。今度もその會の總會を開いてゐましたが、これにも當分の內ごいふので帝國教育會長即澤柳博士が會長の椅子についてゐるのですが、殆んど皆會長任せで、喜んで役員の選定まで會長御一任をやつてゐるのを見るこ心細くなりました。

早くこの團結が力を持つて動き出すやうにならなくては面白くなりませんね。きつといまにさうなると思つて、たのしみにしてゐるのです。何といつたつて、婦人の會として力づよい立場をもつてゐる點で數少い會ですからね

勿論現在の聯合の單位になつてゐる縣市郡の女教員會といふものにもかなり問題はありますが、女教員といふ職業意識にめざめたものゝ結束が、少數でもいゝから生れたら、待遇問題でも何でももつと〳〵力づよく實際運動化される事でせうに、とは思ひますがねね。」

A「では私も來年は傍聽にゆきませう

B「何だか來年は地方で開く話もありましたが、ぜひいらして御覽なさい。」

——一五、六、二四、豊橋にて——

・・・・　・・・・



婦人と消費組合運動

本位田祥男

現在では、成長した男子の家庭生活の時間は非常に短くなつてゐます。起きるや否や、生活のために出かけて歸るのは、日の暮れる頃です。甚だしきは日暮れても尙勞働を强ひられ、又は金儲けの爲に、或ひは單なる遊びの爲に歸らない狀態です。然しそれは決して繼續すべき狀態ではありません。勞働の時間はもつと短くなるべきです。本來は、各人の家庭生活の時間は長くなり、家庭生活の人生に對する地位が大に重んぜられて來るでせう。此の重要な家庭生活を主宰する婦人の任務は非常に大きいといはねばなりますまいかういふ重大な任務を意識するにせよ。しないにせよ、兎も角、婦人は長箛い間家庭な主宰し、そしてその中に閉籠りがちに今日に至つたのですがかういふ重大な任務を意識して家庭に閉籠つた婦人は至つて少數の人々に限られてゐたでせう。夫れにしても、長い間男女の間に此の分業が行はれ、婦人が家庭を主宰して來たといふ事は深い意味を表はしてゐます。然し、家庭を受持つ婦人はあまりに消極的でした。家庭は社會の中に復雜な關係をもつて營まれてゐるにも拘はらず、彼女等は單に家庭の中に於ける仕事の處理にのみ沒頭してゐました。家庭以外の事は自分達の如何とも爲し得ない事として打捨てゝおいたのでした。

◎消費者より見たる現在社會の不合理

日本で經濟上の國難來ると大騷ぎをした時、消費を司る主婦に訴へるより他ないことに氣がついたのでした。然し此の消費を節約し合理化し、能率をあげるといふことは、決して困つた時だけ考へてよい問題ではなく、平時から絕えず永遠の問題として考へられなければならない事です。

一体今日の經濟の組織が浪費を進めるやうに出來てゐるのです。生産者はどんな下らない物でも廣告さへすれば賣れるものとして、常に買へ〳〵と勸めてゐるのです。彼等の眼中には消費者の利益など毛頭なく、たゞ消費者を誘惑するのが第一番の政策なのです。此の誘惑に成功したものを世の成功者として尊敬する社會に於て、思ひ出した樣に節約を宣傳したとて効果のあるはずがありません。遂にはそんなものは買へない樣に、民衆の收入を減ずる等と云ふ非人道的な事迄唱へる者が出て來るのです。此世から徒らな贅澤や浪費を廢する最もよき分法は、生産を

爲し、又之を消費者に取次ぐ者が、常に消費者の幸福を念じてゐるやうにすることであります。消費者の幸福を最もよく思ふ者は消費者であります。

消費をする際には色々の價値判斷が交錯するから、單なる經濟的見地からは定め得ませんが、已にある消費をしようとする場合には、如何にすれば一番經濟的に爲し得るかといふ問題が起ります。夫れには經濟的の主な點は如何すれば良い品を安く獲る事が出來るかといふ事です今日では物を自家で作る事は極めて例外ですから如何にすれば物を經濟的に買ひ得るかゞ問題です主婦は家庭に閉ぢ籠つてゐます。そして此の物を買ふといふ事によつてのみ社會と經濟的に結びついてゐるのです

では婦人はどんな風に品物を買ひ入れてゐるでせうか。數年前の不景氣以來公設市場が大分開かれて、其處に買出しに出かける人が增しましたが、多くは未だに御用聞きの來るのを待つてゐます。御用聞きは甚だ少ない見本或ひは品書きを持つて來るに過ぎませんから、主婦は品物を選擇することも出來ません。又値段に至つては夫れを聞かない者すらあります。月末になつて高いのに驚くのはよい方で、一体それは世間でいくらするものか全然知らず高いか安いか分らないのが多いといふ始末です。御用聞きがあれば其人を養ふだけの負擔は當然消費者が負はされます。且つ今日の商業は營利のため、金儲けの爲めに營まれますから、消費者の利益は如何であらうと、儲かりさうならば直ぐ仕事を始めます。だから次第に商人は增加します。さうすれば商人の間に競爭があるから消費者は利益の樣に見えますが、彼等の中には自然に御客が定まります。其商人の數が多ければ多いだけ少數の客が商人を養つてゐる事になりますから、自然消費者は商人に高い代價を拂はされます。度々商人が暴利を貪るといふ聲を聞きます。然し小賣商人が僅かに數十軒のお客を相手に商賣して生活するのだからそれだけ値開きさせねば生活出來ないのが多いでせう。今の日本の小賣はさういふ狀態にあるのです。だから安く買ふ爲にはどうしても此亂雜な無秩序な小賣組織を改良せねばなりません近來歐米にチエーンストアが勢力をもつて來ました。或大きな資本家が各地各町に店を開き、大きな資本で小さな小賣商と競爭して次第に夫れに打勝つてゐます。それが勝てば無秩序過多といふ事は除かれますが、若し夫れが獨占的地位を占めて來ては更に一大事です。もと〳〵彼等は金儲けの爲めの商業ですから、競爭者がなくなれば値段を引上げるは當然です。だから、どうしても眞に消費者の爲に營利の爲でなく――經營するのでなければ決して安くはならないのです。

高いといふ事は單に物質上の問題でありますが、金儲け主義が、買ふ者、賣る者に對する精神上の影響は更に恐ろしい、商人は出來るだけ高く消費者に賣りつけやうとします。而も一方、

無自覺の者はともかく、自覺した消費者は自分の爲に少しでも安く買はうと努力します。努力をしないまでも彼奴は不當に高く賣りつけてゐるのではないかと疑ひます。所謂商業道德が發達し、消費者が注意深くなり、目が利いてそんな事は最早やなくなつても、高く賣らう、安く買はうの爭ひは、營利主義とは離るべからざる關係にあります。此疑ひと爭ひとがあつて、我々はどうして良い生活が出來ませう。此の如き爭ひは商人と商人との間、商人と生產者との間生產者同志の間凡ての經濟行爲をする人の間にどうしても免れません何故ならば田を耕す人も、工場を持つ人も、問屋も、悉く金儲けの爲めに其事業をやつてゐるからです。即ち八方を白眼し、同時に八方から攻めつけられてゐます。その包圍攻擊を却つて押倒すか、或ひは一方の血路を見出さなければ彼は成功したとはいへません、生馬の目を拔くと驚いたのは昔の事です。今では彼等は同時に多くの人の幸福を犧牲にしやうと刻々に努めてゐるのです。然し夫れは、その地位にゐる人がわるいのではありません。其人を責むべきではなく、罪は營利主義組織そのものにあるのです。そこで營利主義組織をどうすれば、よいかの問題になります。消費を司る婦人も亦買ふ事を通して、常に此の社會的な鬪爭の渦中にあります。此の爭を除く爲には人々は金儲けの爲でなく眞に直接に消費を目的として生產しなければなりません。同一社會に住む凡ての人の爲に生產するならば、其所に始めて相互扶助の實が上ります。消費の爲に生產するには、消費者自らが其生產に參與し發言しなければなりません。消費者が協力してその生產に與つてこそ、始めて眞に消費のために生產し得るのです。斯る協力的な生產は不可能でありませうか。否斯る協力が消費組合運動として實現してゐるのであります。

◎消費組合運動會への婦人の參加

扨て消費組合運動は、從來主として男子の仕事でありました。最初組合を創立するものは何處でも男子でした。然し元來家庭の消費を司るのは何處でも婦人であります。假令男子が消費組合の福音を聞き、自分もその運動に參加しやうとしても、家庭を司る主婦が共鳴して消費組合から日用品を買はなければ其家庭は組合に加入しないのも同樣であります。之を組合の側から見れば、組合は其組合員を增加することも出來ず、從つて事業を擴張する事も出來ないのであります。

我國に於ても消費組合の聲を聞く事は久しいものです。そして多くの組合が、設立されましたが、或ひは理想のない形骸に終り、或ひは着實なる努力を缺いで失敗にをはつてゐます。果は消費組合の如きは國民性にあはないといふものすらあります。然し、彼の團体運動にたくみな英國に於ても、ロッチデール組合の出來る迄には、多くの年を必要とした事を見なければなりません。唯忘れてならない事は消費組合

運動が各々の生活費を低廉にすると共に人類の文明の上に如何に大きな意味をもつかといふ事です。隣人への愛、普く人々の相互扶助の社會を建設するといふ組合の理想をしつかり摑み、其爲めに努力を惜しまないならば、やがて世界の人々と共に彼岸に達する事が出來るでありませう。

之等の多くの失敗には、婦人が組合運動に共鳴する事の少なかつたといふ事も其理由の一としてみなければなりません。男子が消費組合の意義を認めて加入しても主婦が之を利用しないとか、其使用人が商家の御用聞きよりも頭が高いとか、一寸電話も借りられない等といふ極めて下らない理由で、彼等達は組合を排斥するのを聞きます。有り餘る生活費をもち、何等の苦勞なく、そして無反省に傳統を守り、本能の欲するまゝに生活してゐるやうな女性には消費組合は何のかゝはりもないかもしれません。然し若しも女人が消費組合運動に參加するならば、彼婦等は其消費を、より合理的により安くする事が出來ます。物價が高いといつてこぼし、他に頼らなくとも、自分達の力によつて物價を引下ぐることも出來ます。そして生活を安定することは其家庭の人々が能力を發展させる條件であります。婦人が參加する事によつて消費組合運動が此の世を支配するならば醜い爭はなくなります。人を愛し度いといふ慾望と隣人を愛さなければならぬといふ道德的命令とは何等の障害なく果されます。愛しなくてはならないが、夫れでは自分の生活は犧牲となるといふ懸念なく、利他と自利との完全なる調和が現出されます。

（消費組合パンフレットより拔萃）



男子不用論

醫學士　杉浦　清

婦人の妊娠に、必ずしも男子を必要とする事、即ち同衾したとかせぬとかいふ男女關係のみで妊娠を考へやうとするのは、過去の夢となりつゝあります。

それは人工妊娠です。人工妊娠といふのは、男子から精虫を採り出し、之を注意深く人工的に培養しこれを女性の胎内に輸送し受胎する方法です。人工妊娠の最初のイデーを築いたものは魚類に於ける人工不化法で次いでは犬馬等の家畜類の人工受胎で、やがてこれ等の研究成績が人類に應用され、所謂人類の人工妊娠術を產むに到つたの

です。馬匹に於ける人工妊娠は既に古くアラビヤに於て十四世紀頃から試みられ、今日では非常に進歩してゐますが、人間の人工妊娠は、從來實驗によると、その試驗の約四一%は見事に受胎してゐます。此比率は家畜のそれに比し甚だしく不成績の如く見られますか、家畜それが健康完全なるものに施されてゐるのに、人間に於ては不妊症の夫婦即ち病人に試みられてゐるのを考慮すれば、寧ろ成績良好といふべきであるかもしれません。

今や己が遺精した精虫で雲煙萬里の異境に居る妻を受胎せしめる事も不可能ではないといふ事になりつゝあります。

斯の如くであれば、男性に必要な事はその精虫のみであつて、精虫を採取してしまへば、その男子は死んでも差支へないといふことになります。

之に反して、受胎は婦人を引合に出す必要がないとは、今日の醫學では絶對に言へません、のみならず、爾來妊娠といふ四十週間の長きにわたり、我々人類の生命は婦人によつて擁護される理であり、現今の處受胎妊娠は婦人は絶對に必要であります。

茲に於てか受胎妊娠をさしはさんで女に絶對の權威が現はれて來ます、蓋し「生殖」から見れば男は精虫の影法師にすぎません。これは大事な事で私の言はうとする骨子です。そして此事實は頗る平凡のやうですが、これが思想界に投ずる影は所謂第二のボルシエヴィズムではないでせうか。

以上で我々は男子の比較的不要であるといふ第一階梯をふんだと思ひますが、次にまた生殖細胞の上からも第二の階梯に進む事が出來ます。

一体我々人間が個体發生の第一歩をふむのは、受胎即ち一卵子と一精虫との融合にあるのです。然るにその數を見ますと、極端な不合理を發見するのです。

男子一回の射精量は最小限〇、八五＝一・〇八立方ミリで、最大限五・〇〇六・〇〇立方ミリの間を上下してゐます然してローデによれば精液一立方中に含まるゝ精虫の數は約六萬であつて、普通一回の射精に排出される精虫の數は平均二億二千六百萬、その最大限度は實に五億五千百万の多數に上るといふ事です。

之に反し、卵子は漸く四週間毎に一回泌卵せらるゝのみか、一回の泌卵數は僅かに一個です。即ち四週間毎に一個づゝの完全卵が排出されるものとすると、一年間に十三個、婦人一生涯の排卵數は月經初潮より閉止期迄を三十年乃至三十五年と見て、三百九十――四百五十にあります。今假りに男の子射精回數を一週三回を守るとすれば、女子一個の泌卵に要する四週間には、十二回の射精が行はれ、この精虫の數は二十七億一千二百萬、一年間三百五十二億五千六百萬となる理です。尙男子の生殖能力持續期間は婦人のそれに比して甚だしく長く、ハーブルグの研究によれば九十歳の老齡にして精虫を

證明する者四八%あります。即ちその持續期間は、婦人の約二倍と見て差支へありません。

そこで我々は以上兩性生殖細胞の上より男女の必要數を計算して見ませう今一月經周期を四週間とし、男子の性交回數を一週三回としますと、次の如き數字上の相違が起つて來ます。

	女子排卵數	男子精虫排出數
一月	一	二七・二〇〇〇〇〇億
一年間	一三	三五二・〇〇〇〇〇〇億
一生涯	三九〇	一七六二八・〇〇〇〇〇〇億

(但し女子生殖能力持續期間を三十年とし男子は五十年とす。)

從つて今各文明國の樣に嚴然一夫一婦制が守られてゐたとしますと、男子の一生を通じて結婚難を訴へる精虫の數は一七六二七・九九九九九六一〇億の夥しい數です。

この彪大な數を御覽なさい。これをマルサスの人口論に問へば男子の過剩といふ事になります。過剩といふも滅茶々々の過剩です。之を換言すれば男子はもつと〳〵少數でよいといふ事になり、大多數の男子は不要だといふ事になるのです。

さればどれだけの男子があれば兩性生殖細胞配偶上の公平な一夫一婦が保たれるかといふと(勿論精虫の人工埒養が完全し、人工妊娠も完璧となつたとして)

$$\frac{17628000000}{390}=4263600000$$

の女に一人の男があればよいといふ理になります。

處で、四十二倍といふ數は並大低の數ではありません。獨逸統計年鑑によると五大州の老幼合せても女は僅かに四億(390679209)しかごりません。即ち一人の男の精虫が要求する女の十分の一にも充たないのです。况して此の四倍の女の中半分は生殖能力のない老幼だとすると、二十分の一にも充たない事になります。

言ひ換へれば、世界中には一人の男子も過剩であり、もつと〳〵滅弱し、〇、〇五人の男にせねばならぬといふ事になります。それにはその一人の男の生殖年齡を制限することです。前に我々は一男子生殖能力持續期間を五十年と計算しましたが、之を二十分の一に減じ二年半とすればどうやら所期の目的に近づきます。

即ちどれ丈の男子があれば兩性生殖細胞の公平たる一夫一婦が成立するかといふに、男は世界中に唯一人、それも男子の懷春期を十五――十七歲として、それより二年半以上を生きてはならないといふ事になるのです、

依つて男子の比較的不要論は次の如くです。「並界には唯一人の男子さへあれば他は恐く不要である、而しその一人も二十歲以上に生きる必要はない」と重ねていひます。

懷妊には精虫こそ要かあるが、男には要がないと云ひました。ベネヂンば男性は女性に養はれてゐる睾丸に過ぎないと罵りました。然しこれではせめ

て一疋の男子位は精虫産出器兼貯藏庫としてどこかに飼育しておく必要があります。しかしこんなものは一疋もゐなくてもよいといふ研究が起つて來ました。即ち精虫の人工です。

精虫の人造それは今日の處まだイデーです。然乍ら精虫の機能を物理化學の力で代表し人工した實驗ならば由來澤山あります。例へば雲丹の卵子は受精しないと發育しませんがこれを試驗官内で適當に振落するか、一定の高溫にさらすか、鹽化苦土を注加するかすれば立派に發育します。蛙に於ても同樣非受精卵を發育せじむる方法あり更にやゝ高等な蛙についても近來レービー並にバタイヨンは或刺戟によつて略蛙の形態にまで發育せしめる事が出來たといつております。

之等の事實は蓋し精虫の人造と見て差支へないと思ひます。少くとも之によつて受胎即ち「子の出來る」といふ現象から、精虫なる男子固有物は遠ざけられ、不要のものにあつたと見て更に差支へありません。但し勿論之は蛙以下の下等動物に於てであつて、しかもその發育成績は極めて悪く、之を受精卵と比較すればその壽命や体の大きさなど甚だしく心細いものでありますが之は科學進歩の至らない結果であつてやがてはこの難關を突破する日がある事を信じます。斯くて我々の受胎妊娠には精虫でさへも必要のない事にあり、やがて絶對に男子なくして女子懐娠の事實を想像することが、不合理でなくなります。

そこで男は人類の無用物になりますこの世智辛い世に、無用の長物たる男を澤山飼つておく事は經濟が許しません。從つて之等を地球上から撲滅する必要があります。但しその撲滅たるや容易の業ではありません。女力即ち人力を以てしては到底爲し難いと見なければなりません。

茲に於てか神は男子撲滅策を下し給ふのであります。　即ちその第一は戰爭、第二は病死自殺、第三は男に課せられた致死的要因、その第四は殖産興業です、

戰爭乃至爭鬪、それは皆殆んど男の同志討ですが、之が如何に多くの男を倒しますか、言を俟たないでせう、神のこの撲滅等は永くつゞく事と思はないではゐられません。

病死自殺…、之亦男子撲滅策こしては侮りがたいものです、我國の最近の統計によると一年に男の方が一萬三千人だけ多く病死するといふ事になつて居り、自殺者も男の方が一年に於て二千六百人多い事になつております、

男子撲滅策中最も要領のよいものは男子に課せられた致死的要因です、致死的要因とは要するに死に易い素質を備へてゐることです、一般にどの母でも男の子は育て難いといひますが、それは弱い爲、特別の注意をしなければ死ぬのです、然し胎内ではもつこ死易い(數字略)

これを要するに、神樣は「男よ死ね死ね」と仰しやるのです、然るに男と

いふヤクザ者、古今東西文野の別なく皆男尊女卑と盲信し、女までがかく考へてゐるのです、父ご稱して母に先んじ、夫と稱して妻を顰し男と稱して女を雌服してゐます、一体我々人間には父と稱する直系尊屬は母に附隨して出來上るもので、獨立した父なぞはないはずです、母は受胎し妊娠し分娩する以上迷ふ方なき母ですが、父と稱する不動不易の何の證據がありますか、母が母である事は、事實ですが父が父であることは今日では單に認識にすぎません。それから夫だつて一般男子だつて、精虫の影法師にすぎないではありませんか。しかも精虫が人造されたら消えてなくなる幽靈を祀り上げて男系家長主義をとる文明國なぞ、恐らく神の目には狂氣沙汰しか見ゐますまい。

重ねて申します。「神は男よ死ねよ男を殺せよ、」こ仰せられます、殊に吾國は女ならでは世のあけぬ岩戸隱れの神話を有する、由來女を神位においてゐる國体です、吾々は昔も今も女は太陽であると考へたいものです。

神は常に「賢母たれ」こは仰有いますが、「良妻たれ」なぞと男の勝手な捏造語を御發しになつた事はないのです、吾が日神は賢母としての範をお示しになつても良妻としての範はお示しになつてゐません、マリア樣も、「賢母」としてのマリア樣をおいて他に何がありませう、

母、母、エデンの園にも高天原にも此の一語で澤山です、良妻とか妻とかいふ餘外な言葉は抹殺しませう、何故なら世界には男は必要はないのですから、

母！賢母！　＝報知新聞＝

……（九頁より）……

にに伴はれて立つか、など尋ねて島田氏に御相談いたしましたが一人は借金をそのまゝにし二人は七分拂ひにすませて立つ、けれども今本人たちに何を話されても益なしこ思ふ彼等は保護者の自由になる者だから、むしろ親許へ注意して下さる方がよからうといふ事で本部守屋姉宛に用紙三枚の長文電報を打つて一切を頼みました、十日の午前上野驛に着きました三名の内、一名は父親に迎ゐられて自宅に戻り、外の二名は附添の者と共に一先づ大久保のホームに立寄り懇切に色々御說き下すつた守屋姉の御話を涙ながらに聞き、それ〴〵ホームから其人たちの鄕里まで送り屆けて下さいましたさうでございます。斯くして島田氏の懇切なる御手配に依り十一名の内福山りう（二十六歲）石井よね（二十五歲）春原きみ（二拾五歲）の三人は婚約成り拾二せき（二拾歲）森崎芙蓉（十四歲）の二

……（三五頁へ）……

感想と隨筆

朝の美と力

生田花也

私は「朝」について語りたい。それを一日のはじまりに於ける朝の氣象として云つても見たいし、人間生活の幼年期、所謂、人生の朝といふ意味について云つても見たいし世紀のはじまり、宇宙の朝といふやうなことにまで心を持つて行つても見たい。

朝、これをもつと細かにいつて見れば、拂曉、黎明、あけぼの、日の出まへ、日の出づる時、朝日のかゞやく空、朝の讃美はとりもなほさず、太陽への讃美であると云ゝてもいゝ太陽への讃美は、古來人の間に間行はれたる一つの宗數でもあつた。「なんぢが惠みの彼等に及ぶ時、その生命は躍動せん」とうたつたとかいふエジプトのアクナートン王の歌を私は面白いとおもつた

又太陽への、力づよい朝への頌歌は「われは屢々見たり、朝ぼらけ、東は薔薇の色、西天靜列の影涼しきに、日の面朝霧の幕に和らぎ……」朝の犖犖たる光の中より現る、天の使の擘をもつてして、詩聖ダンテの語らんとするところのものは、これを單にクラシツクの虹のごときローマンスとしてのみ見ることは出來ない。

いつか、松居松葉氏であつたかとおもふが舞臺に出す朝の光線の確實性を得やうとして毎朝々々、あさぼらけの景觀を見るために附近の高處にたゝずんだといふやうなことを何か書かれてゐた。それを讀んだ時、私は實に、いゝ感じをうけとつた。朝のまだ暗いうちから日の出きるまでの偉大なる光の生長については私も心からその美と力とを感ぜずにはゐられないものである。少女時代、私は鄕里の村里にゐた時、朝三時四時におきる家人のもの音によびさまされて少くとも五時前にはパツと見覺める。すると私は、その寢床からすぐに野の方へとはしつて行つた。そして家の近くの高所に立つて、そこから、東の空のおどろくべき美にむかつて幼い眼を凝視させる。「聽け、聽け、雲雀、

天門に歌ひ、日の神起きはじむ、神馬に水かばんとて盃なす花のうてなのその泉に」とうなつたロバート、バアンスはおもふにやはり朝の情感に徹するところにその法詩をやしなつたものであらう。

朝起きは小供の本性である。朝、小鳥とともに起き出で太陽ののぼるのを待たうとするのは肉體そのものゝ本能である。從つて小供の朝のかほを見よ。ごんなに生々した血色のよい、花のやうなみづ〳〵しさにその小さな存在を張り切らせてゐることであらう。朝日にむかつてパち〳〵と手をたゝくのは普選老人の慣習である。小供は拜まない、その太陽の中ではね上る

丁度鯉のやうに朝の光ではねあがる。かうした幸福が田舍の小供にはチヨコレートやステイヤラよりもよりよいめぐみではなかつたか、そして文明人が、古い世紀の人々にとつてもし不幸な點がありこすれば、それはたしかに、諦を味ひ求めない點にあるであらうか。「また今日も働かねばならぬかこ朝なあさなの目ざめにおもふ」これはどうかで見たある勞働歌人のものであるか、何といふわびしいあぢきないつぶやきであらう。朝が、この場合苦惱になつてゐる。かういふ心持はこれを不幸こいはずして何であらうか。もつとも說を立つればこの嘆きの背後をなす資本主義の惡制度に對する諸問題は山のやうにある。私は、さうした問題に對するプロレタリアの各方面への闘爭をいつも合理的時潮として考へずにはいられない。だがこれを一個人の問題として考へる時、かうしたつぶやきをなすの環境を突破するの力なくしては、又、ブルジヨアへの大抗議、大運動を充分効果的になすべくもなからう。そしてかういふ不健康な身心の狀態にゐる人々に對して私は、朝を味ふがために、一日、田園の高所に彳むの策をつけたい。たゞ一回、もしくば二日、もしくば三日、失業にくるしむ心、失戀にくるしむ心、病弱にくるしむ心、いかなる心こいへども「朝の洗禮」にめぐまるべきである。

それはほのかな明るみである。白いといふべく柔かであり、光りといふべくまだ遠い、ぢつと見てゐるうちに、横雲が、その棚引の形をくつきりとさせてくる。浮んでくるなほも見てゐるうちに、紫をさしバラ色をさし紅色をさし、

白金光をさして明るく伸る力の電波のやうなものが、つゝましげに立つ人間の心の中をさしとほすがやうである。そしてか弱い人間が、ある不思議なる靈感に包まれておもはず「吾れ在り矣…。」の强烈なる自己認識を体得するのはこの靈光の中においてである。どんなに才能がはくとも、又、どんなに環境がゆるくても、又、どんなに病い身體であらうとも、「朝が」人間の生存にたれかゝるとき眞正のものが心によみがへる。都會の朝はなほ濁つて重い。しかしなほ、早朝の空氣は都會の家々の埃をしつめてゐる。窓をひらいて大空の朝にむかつて、小供とこもに、小鳥ことこもに、かの偉なる劫初よりの光明を仰がしめよ。

感想四つ

くさのとり

一　入學こ金持の子名家の子

「女學校への入學と、金持の子名家の子」うそかも知れぬ單なる噂話かもわからぬ。併し、とにかく毎年三月四月の頃になると、私の小さい耳の中にはいつて來るのは此の問題である。

清廉そのものゝ様な顔をしてゐる府立がかうであるときいては、私の憤りは、ほのほともえ上らずにゐない。生活にあへぐ父母をもつ可憐な子供たちよ、お前はなぜに金持の家に生れなかつたのか、名家の子と生たなかつたのか。

成績ばわるくとも、市長の娘であるが故に、博士の娘であるか故に、金持の娘であるが故に入學させるといふ校長のその心のみにくさよ…。

私の友達は、かつてかういふことを、ある府立の女學校の先生にきいたといつて話した事がある。

「校長の口頭試問の時、電話はなくともあるとおつしやい女中が一人なら三人といはれるがよい。ついでに書生もゐるといふがよろしい。」と、

ドングリのせくらべの様な教育を施す官公立の學校よりも、まだしもカタワモノをつくる私立の學校の方がよい。府立々々と。さわぎ立てる世の父兄の目が、いつになつたらさめることやら。

二、新聞の品位

人格のあらはれるといふものはおそろしいものだ。心して大阪朝日新聞と毎日新聞とをよみくらべてごらんなさい多くを云ふのは用はありますまい。

朝日毎日に及びもつかないとはいへ、大阪時事新報の全體に流れてゐる空氣は、他にくらべられない親しさとなつかしみをもつてゐます。

三、ある侮辱

ある專門的な雜誌へのせるべくすゝめられて、私はある種の小さな研究文を書いた事がありました。二月立つてもの私の其文は活字にはなつてまゐりません。紹介者の手許へは、編輯者から來月はのせるでせう等いつてよこしてゐるとはきいてゐましたが、餘りに長い間になるので、忘れるともなく忘れてゐました。

ある時、私の尊敬してゐる某博士か東京から歸つて來られました。

「Kさん、あなたは東京へ原稿を送られたことがありますか。」ときかれました。

「えゝ、去年でしたか、Mさんの手を經て送りました。」

「さうでしたか〇〇君が「あれはKさんが自分で書かれたものなんですかしら。」といつてゐましたから「さうでせうとも、Kさんは女ですが中々議論家ですからといつておきました。」

編輯者は、紹介者が、私の名をかつて書いた原稿とでも思つたのでせうか。それにしても、あんな貧弱な原稿がどうして女の私が書いたのではない、と思はれたのでせうつまらない原稿だから活字にならないのだとばかり思つてゐましたのに。

併しこれは又何といふ侮辱でせう。私一人ではない女性全體への侮辱とも申されます。なぜなら、編輯者〇さんと私とは全く未知の間柄なんですから。

四、女性の雜誌

ウースンカレントを見る度に感じることは、もつと此の雜誌が開放的であつてほしいといふことです。同性の貴い仕事として尊敬をもつ前に、餘りにもその文壇的ブルジョア式なのに反感をもよほされます。

「私の雜誌には既成作家でなければのせないですよ。つぶ

よりなんですもの」といはんばかりの編輯ぶりにはどうしても同感することが出來ません。三宅女史の個人雑誌として女史自身の好みのまゝに編輯されることに、他人がかれこれ口出しすべきではないかもわかりませんがつまらりない婦人雑誌の多い今日、女の力で出來る雑誌として、私ははじめこれだけの愛と敬とを、此の雑誌と女史とにはらつてゐた事でせう。

併し、私はすつかり失望させられて了ひました。女史はあの雑誌を餘りにも自分一人のものにしすぎていらつしやいます。あの、調子では私共女性の友としては、まだ／＼心の底から親しみすがりよる心もちはもち得られません。

女史の心が、もつと／＼平民的になり、もつと／＼深く大きくならねば、文壇の女王の様にもてはやされていらつしやる現在の、あのかゞやかしい生活も、やがては多くの同性の心から離反されてしまひはせぬかと案ぜられます。

こんなに書いたとて、私は別に女史に原稿を送つたこともないし、うらみもないのです（むしろ一番好きな女性の一人でした。）たゞさうした感じが事毎につよくなつていくものですから、同じ女性としてかうした心の動きをもつものゝある事を、同じ様に雑誌の編輯にたづさはつていらつしやる奥さんの御參考にもと、いらぬにくまれ口をきゝました。

（一九二六、六八）

母と子との記録

伊福部敬

小鳥のやうな、花のやうな、そして又グラスのやうな
美しい人々が食後の一席の歡談の輝やかしい物語りを書
きつゞつてゐる時、
母ちやま、母ちやま、
うまく／＼貰つてちようだい、
と子供は私の背にすがりつく
なるほど、
ドンドン／＼と原つぱの方でひゞく飴やの太鼓　子供達

の歡呼の聲、
あとでね、あれは汚ないのだからね、こすかして、そして何時に似ず物となしく聞き入れた子供を眺めながら
齒をくひしばつて泣く母心
物語りの中の子供たちは
森永のツタンカーメンにミルクをつけてたべてゐるのに
私の財布には、
夕餉の豆腐をかふための
白銅がたつた一つ。

「舜ちやん、そのポン〳〵御飯（お結びのこと）お上りなさいたべなくちや大きくなれませんよ」

彼は御飯以外のものばかり好んでたべる。

「もうぽんぽいたいなるからいや、このポンポン御飯お猿にやりませう、ね、やりませうね。」

私は思はず樂しい笑を笑つた。彼は此頃眠り際に猿蟹合戰を話してもらつてゐる。

私は爪を切つてゐた。その鋏は切れない方の鋏で、いつも危くないこ稱して、舜子に貸してゐたものである。

「母ちやん、それ危いないハサミでせう、切れるやうになつたの、」

「えゝ」

「どうしたの」

「ハサミヤさんでなほしてもらつたの」

すると彼は、此間竹棒で突いた左足を出した。

「僕ね、あんよ痛いないなつたよ」

「どうして、もうなほつたの」

「僕ね、あのね、足やさんでなほしてもらつたの」

よい母であり度い、全智全能の母であり度い、彼等の中に芽立つ智慧を、希望を、あらゆるものを傷けず損はず、向日葵のやうにのびやかに育てゝやり度い、世の母親がもつやうに、私もこの希ひをいつも希つてゐる。まづしい家の母である故に、私のこの希は、より一層强いものであるかも知れない。

けれども、渾純こした憂鬱に家やが密閉される時、はけ口のないいら〳〵しさが心臟までも扼してしまふ時、すべての禍の元は二人の子供、家庭を破壞することを不可能な

らしめてゐる所謂かすがい、ドレィ的存在をその母に强ひる子供、そこからすべての不幸は湧くとしか思へない。子供さへなかつたら、こんな不愉快な家庭位こはしてしまふ子供がなかつたら、も少し自分自身の生活といふものをもつことが出來るだらう。

そして私は子供につらくあたる。打つて〳〵泣きつぶれるまでいぢめたくなる。私も終ひに聲をあげて泣き出してしまふ、

どんなにやさしい聲で毎夜お伽の歌を歌つてやつたとておちんちんなんて云ふ人はお馬鹿さんですよなどゝ敎へたところで、そんなことで千日積み上げた効果も、一度打つたり怒鳴つたりすればふつとんでしまふではないか。こんな事でどうする。こんな無理想な無信仰な日送りを子供の上に重ねていつて、やがて子供はどんな少年になるだらうカール、ヴヰツテの早敎育はどうした、フレーベル式の理想はどこへなくしたか、

理想などと云ふものは抽象的な架空的なものにすぎない現實の强さには一氣にふつとばされてしまふものなのだ書物の中で考へた整然たる敎育法なんぞより、打ち怒鳴り笑ひ抱いてゐる日々のこのナマの生活が、子供の身となり糧となつてゆくのだ、かういふ卑怯な考へで自身をなぐさめてはみるものゝやつぱり悲しく淋しい。

おだやかな心をもつて、せめて子供にだけ接したい。

隷屬的生活からのがれたい、少くとも自分の時間といふものを持ちたい、どんなに前から私はこの事を重んでゐたか。

彼は外に出たい時は出てゆく、麥酒と、子供と空の財布をのこして、

彼はねむる、私が朝の味噌汁を温めなほし〳〵て私達が空腹を押へてゐるのを承知で、

彼は談笑して飲む、私が明日の食料の乏しいのを苦にしてゐるのを知らぬげに。

そして私は彼の脫ぎすてたものを洗ひ、たゝみ、子供と共に殘された麥酒を整理するに一日を費す。そしてその日が暮れる。

毎日々々を智識に飢ゑ、し戟に渇し、彼の存在を天氣と

同じに感じて來た。
私は他に仕事を求めやうとしてゐる。自分の時間と云ふものを得、自分の生活と云ふものを持つて、それによつて日々の不愉快から少しでものかれやうとしてゐる。
しかし小供は…、
彼等は母に手を引かれて、 叱られ〳〵電車道を横ぎるこゝや、空腹を我慢してわけのわからない話を聞くことを何と思ふだらうか、

……(一七頁よりつゞく)……
人は早くに親許へ戻り早川こと(十二歳)は祖母につれ歸られ、北村きく(拾四歳)古田やす(二拾二歳)荒川はる(十八歳)の三人は十日の朝上野に着いてそれぞれ郷里へ戻りましたので尚ほ島田氏方に殘れる北村きくの姉なる北村つる(十八歳)小林こみ(十二歳)の二人だけで此兩女も遠からず決定いたす樣に承はつて居ります。
本部でも久布白姉は其四名の者の外借金をなすつて救ひ出す道のため直ちに五百圓の金の御心配をなすつて下さいました。(先づ女教員大會に於て第一に八拾圓餘り作られ其他澤柳博士、フレンド女學校生徒吉岡彌生女史、等の御同情の外大半は林伯夫人の御同情を以て)最後に山縣廳を訪ね「今回非常な英斷を以て解放せられたる十一名の者が若し何れかの地方に於て再び身賣りをするやうな場合があつたら折角の島田氏の厚意も水泡に歸する譯、且つ本人としても決してなす可き事ではないから今迄法律上何の規定もなかつた樣ですが、玆に新例を作られて必ず再び身賣りをせぬやう警察側から特別保護して戴くことに何か全國各地へ一齊に通告して頂くわけに參りますまいか云々」と願ひ出ました縣當局では島田氏が誠に善き新實例を示されし事を賞讃せられ「警察局長の方々にも良色考へもあるやうであるし又當方にも種々取調べ居る點も有り何とか相當に好き方法を取るやうに打合せしませう云々」と言ふ樣に誠に力強き御意考を伺ひました(以下略)

婦人新報より

板を被つて寢た話

宮地嘉之

私の勞働生活が二十年間續いたとすればその四分の一は徹夜勞働をして來たことになる。呉にゐた時分は一週間交代で約五年あまり私は徹夜勞働をしたが、徹夜勞働をしてゐた時分の何よりも、私にこつて印象深い歡喜の思ひ出はあの夜明け方の工場の窓硝子の薄白い色を仰ぎ見る時の嬉しさである。その喜びは皆の顏色に一樣にそれこなく見られたもので、さあ夜が明けた……もう天とうさまはこつちのものだ。太陽は俺達のものだ……と云ふ喜びで胸はいつぱいになるこ、そこへ、ぽつり／＼甚の部の交代が辨當箱を小脇に抱いて、おみおつけで顏を洗つたやうな氣輕な風でやつて來る。がごうしたものかそれを見ると「野郎共はこれからふふん、、、日が暮れるまで此所で働くんだな、氣の毒な奴等だ……俺達は、これからお手や顏をお洗ひなすつて、朝日を浴びながら、家へ歸つて、それから女房の顏を見て、（私はその頃女房はなかつたのだが）それから朝風呂に入つて、それからゆつくりご飯を喰つて――」と我が身の希望を數へるにつけて交代の顏が阿呆のやうにも見ゐて、憐憫を感じたものであつたこころが、彼等は彼等で、昨夜はゆつくり夢を結んで、朝はおみおつけで腹いつぱいご飯を喰つて、安チックで頭髮を撫でつけて、まるでお役所にでも出勤するやうな氣持で、睡眠不足の我々の顏を見て笑つてあるのである。ごちらかと云ふと人の眠る時間を、うん／＼と、まつくろけになつて働く方が慘めに違ひない。明け方の窓硝子の薄白い色を見るまでの勞苦は全く地獄を夜通してぬけ出す思ひがする夜の一時三時頃の睡さと來てはなか／＼打ち勝てるものでない。それと云ふのか

晝下宿へ歸つても、寢る時間が何ごなく惜まれて、小さつぱりした風をして町をふら〳〵歩いたり、表面だけでも、遊んで暮らせる人間の眞似をするからであつた。私は晝間はよく睡れない性分であつたから、徹夜勞働には全く弱つてしまつた。どうしても夜中の一時二時になるとたまらないので、工場長の目をぬすんでは、材木小舍へ忍び入つて時には菰の代りに厚板を被つて寢たりした。板を被つて寢たことはその時分の思ひ出話として、一番特種なものである。そんな時は板でも腹の上にのせて寢ると、その重さが何となく厚い蒲團を被つてゐるやうで、どうやら眠ることが出來るものだ。これはまた、あまりにもいた〳〵しい思ひ出話ではある　人間と云ふものはあまりいやな過去を持つと、それに對して一生中復讎してやりたくなるものだ朝は暗い時分から工場の汽笛におびやかされて氣持のよい寢床を見捨てゝ働きに出る生活を二十年間續けたと思ふこ意地でも、今は朝寢坊をしてやりたくなる。

私は決して勞働を蔑み厭ふものではない。私は勞働が好きだ。唯、いやなのは勞働の條件である。勞働者は戰場の兵卒と同樣の、若くばそれ以上の苦酸を味ふものであるならば、もつと社會はこれを好くしてよい筈である。産業軍の勇卒として、相當の年月を工場に働いたものに對しては恩給手あてぐらひはしてほしいこ思ふ―いやつい本音が出てしまつた。こんなことを私が云つたところでごうにもなりはしないとは思ひながら、

――(六月十三日)――

女工の歌

工場は地獄よ主任が鬼で
　廻る運轉火の車
嬉し淚を茶碗にうけて
　親に酒だと飲ませたい。
男工串さし五つが五厘
　女工一人が二十五錢

ある雨上りの午后

平塚らいてうさん、阪本眞琴さん、奥むめおの三人が市川房枝さんと金子茂さんと二人きりで營んでゐられるまゝ事のやうな家庭に招かれて、互ひに久し振りの會合を喜ながら打とけて漫談をした。

平塚さんは私の顏をみるより「高群さんに、私のあの手紙の氣持を傳へて下さつた」と聞く。平塚さんは、近ごろ高群逸枝さんのものを讀んで、女性としてあんなに純粹ないゝものを持つてゐるあの人が、たまらなく好きになつたのださうである。高群さんて、一體どんな人でせう、と聞き返されて、私は逸枝さんのあの、小つぶではあるけれど、可愛らしくくるくつとした濁りのないあの眼のことを心に思ひ浮べ乍ら、口紅の濃ゐ逸枝さんのあの時の印象やいろ〳〵話し合つたことなどを、話した。そしてあゝいふいゝものを持つてゐる人の書くものが、現在、あまり社會的に認められず殊に同性としての女が、まるで冷淡に見逃してゐることに就いて、逸枝さんのものなんか、ほんとに、もつと讀まれていゝと思ふ。殊に若い女の人は、もつとあゝいふものを讀むべきだと思ひますよ、と義憤し合つた。「私もさき頃或雜誌社から頼まれて、Mさんのものを、批評しましたが高群さんの批評をしたいと云つたのだけれど、高郡さんは一般的でないからMさんの批評を書いて呉れと云はれて實は困つてしまひましたわ」と、平塚さんが云ふので、

「おや〳〵、飛んだ處でMさんの提灯もちをおやりになつたのね」と冷やかしたのは誰だつたか忘れたけれど、急に話は M氏論におちた。 未だ十年も昔ならば、とにかく、今の世の中にMさんのものが、受けるこんてほんとに、世の中つて變なものねえ、といふことで、いろ〳〵とあの人の創作や評論やその他について忌憚のない批評が出た。

「Kさんなんか、本氣で後援をしてゐらつしやるのでせうか」

「△△の主人公は、とても現代に生きてゐる人ぢやはないわね。青踏以前のものね」

「△△△△つていふのなんか、とても甚だしいマイナス以上のものね。 同性の一人として全くあんなのを見ると義憤するわ、殊にあの大震災當時にあんな氣持でものを見、書くなんて餘程どうかしてゐる人ね」

毒にも藥にもならないものゝ存在なら、未だ見逃すとしてもあゝいふものゝ見方考へ方で知識階級の婦人の先導に立つてゐるといふことは、全く後進の婦人讀書階級のために、「婦人運動」あたりで

は、大いにかういふ處にも使命を感じて、嚴正な立場から、若い女の人たちをリードしてゆく氣持でやつて行つてほしいものだ、といふことで、わが「婦人運動」は光榮ある使命のお託宣をうけたにくまれ役を仰せつかつたのは困りものだけれど、實際よく內情を知つてゐる者や、人間としてのその人を知つてゐる者にとつて十目の見るところ、婦人界の風上に置きたくないと思はれるやうな人で現在巾を利かしてゐる人が決して少くないのである。

○

M　さんのある創作集の出版記念會のとき、幾人の婦人でも出席したさうであるが、その內の○○さんと○○さんとが、さすがにあの創作を賞めることは出來なくてたとえ將來その境遇が、どんなに變はられても今日のやうにいつまでも　Mさんに對する好意を持つてゐてあげて下さいといふ挨拶でその場を濁しておいたといふ話が出て多くの女の人は、どうしてかういふ場合に裏のある、眞實のない言葉を吐く事が出來るのであらうといふ事でみんなが慨嘆した實際いゝと思はないのならその通り云つて反省を求めたらなほいゝであらう。好意を持たないのなら、そんな會合にわざ／＼出かけなくていゝであらう。いつ迄もが婦人そんな虛禮を繰返してゐるのでは婦人解放なんて夢の夢だらうと思はれる。

■

平塚さんは近ごろ、本能療法とか云つて、精神集注に依つて病氣をなほすことが出來るさうである精神を集注してゐる內に、パチパチ／＼と掌から電氣が發散して來るのださうである。長男の敦史さんもそれが出來るといふ「子供つて純粹だから、わけなく出來るらしいのね」と云つてゐられた。

精神性の病氣の方が一層效力が明らかだと聞いて、私は、それでは私の病氣は癒らないかしら!!!と笑ひながら訊ねた。私の病氣——それは要するに、私がかうして毎日さし迫つた必要に追はれ／＼て第一義第二義的な生活にあはたゞしくゐる內に、私自身の內にもつほんとうのものといふものはだん／＼奧に押しこめられてしまつて何か書かうとしても、いつのまにか出來てしまつた。硬い／＼幾重もの層のため、に靴をへだてゝ搔くといふよりももつと遠い感觸さで、いや殆んど全く緣もないやうな遠さで自分のものではない借り物が（例へば知識とか、概念とか、記憶とか、形式とか云つた風の）或ひはその場塞ぎのまに合はせの繼ぎはぎ細工かしか出來ないやうになつてしまひつゝある事に對する憾みである。

○

平塚さんが一種の精神療法が出來やうになつたと聞いて、私はゐ

何に平塚さんがよく純粋に生きられてゐるかを知ることが出來るやうに思はれて羨やましかつた。高群さんは客の應待も出來ないし、買物をすることも出來ない人だと聞く、思ふ事を書く事たけしか出來ない高群さんが、氏にとつてたつた一つのさばけ口であるところの書く事に依つて——だから高群さんがものを書てゐる場合はまるで憑きものでもしたやうな勢ひであると云ふ＝愈々深く内へ内へ純粋なものを堀り下げて行く、平塚さんは、『自分のほんとうのものが出る時まで何にもしないで待つてゐたらい〻でせう」と云ふ。然し私はそして大多數の女が否應なしの必要に引ずりまはされて、重寶な機械のやうになつて働いてゐる中に、全く阿呆になつてしまふのであるらしい。みんなそれ〴〵に内にはい〻もの特異な才能を持つてゐながらも。（かう書いて來て如何にも書き方が下手でこんな問題をこれで解つて貰へるかしらと不安になつてゐる。）

〇

參政權運動も槍玉に上げられた奥さんなんか、見てゐて氣になつて仕樣がないやうなこともあるだらうけれど、然し實際に入つてゐれば中々そう簡單にゆかない場合が多くて、然しまあ見てゐて下さい。大勢は、い〻方に進んでゆくのだから、と、市川さん、金子さん、阪本さんの三人は交る〴〵に辯護役に立つて努めた。

賀川氏もいつか、「改造の一册も讀んだことが、なささうな女が大分參政權だ、聯合婦人會だと云つて、婦人界を切つてまはしてゐるやうだけれど、」と一非難してゐられたさうであるが、　參政權運動だつて、社會運動の一つだから社會問題としての婦人問題に理解をもつてやらなくては駄目ね、それにしても、參政權運動の中心はだん〴〵古い、　時代の方へ逆轉してゐるさうぢやないのどう婦人參政權なんていふ問題もさきの長い運動に違ひないのだから、將來現代の年若い女の人たちを索きよせてゆけるだけのものを持つてゐなくつちや、時代にとり殘されたやうやうな人ばかりがやつてゐるやうな事になつては、さきが覺付かないわね。

經費の問題もあるだらうけれど然し、金子よりも何よりも質の問題ね、若い潑溂とした者同志が懸命になつて働き合ふことになればうまくやつてゆけるに違ひないと思がねえ。將來三千五百萬の婦人の上に直接にか〻つて來る問題であるだけに自重してやつてもらひたいなあ、私は今の參政權運動のこき下ろしになると隨分雄辯になつて來るのだ。（おく）



完結せざる小說

アンドレーフ

やつぱりそれは、苦しい不安な「日」をやりすごして、疲れはてた體を「夜」の中にやすませると直ぐに眠りにおちて行つた、其の頃の一夜のことであつた。

不意に、私はゆすりおこされて目をさました、傍には私の妻が立つてゐる。其左手には燭臺があつた。覺めたばかりの私の目には、それが恰も闇の中で太陽を見たほどに、まぶしかつた。私は目をすゑてよく見た。と、彼女の顔は其の光の輪の後でふるへ、大きな、親しみのない暗い目は意識を失つたもの丶やうに、瞠られてゐた。

「あなた、お聞きですか、あの人達が此の街に防寨を建て丶ゐるのを。」と、妻は言つた。

あたりはしんとしてゐた。私共は暫くの間抑も言はず、お互ひにじつと見つめてゐたが、私は自分の顔が蒼ざめてゆくのがわかるやうな氣がした。今までの生命といふものが何處かへ消ゑ去つてしまつて、心臓のとゞろきばかりが生き返つて來たやうな外までそのひゞきが聞ゑはしないか思ふほどに高くひゞひてゐる。何の物音も聞えては來ず、蠟燭の灯ばかりがゆらめいてゐる。その焰が小さくて冴え〴〵こもしないのに、焰先ばかりが反りをもつた刀のやうに鋭くみゑるのであつた。

「お前恐ろしいのかい」私はやつとのことで、からロを切つた。

答はやはりなかつた、彼女の蒼ざめた頰はふるへ、瞬きもしないで、じつと私をみつめてゐる。そして私は、その

彼女の目が、いかにも恐い、少しも親しみのない目であるのを、其時はじめて氣付いたのであつた。十年といふ間、私はその目を見て來て、私自身の目よりもよく知つてゐる筈であるのに、今私はその中に、何か――一寸には說明することの出來ない何かを新しく見て、驚いた。誇り――と云つてしまひたいけれども、いや、それともちがつてゐる。新らし何か、やつぱりさう言ふより外ない。私は妻の手をとつた、その手は冷くなつてゐた。彼女はその冷い手でしつかりと私の手を握り返しだが、その中にもまだ私の知らなかつた新しいものがあるやうに思はれた。

　其の時のやうにして、彼女が私の手を握つたことは、これまでになかつたのだ。

「いつからだね…」私はたづねた。

「一時間ばかり前から、あなたの弟さんはもう出てゆきました、あなたが行かせないだらうと恐れて、そつと出ていつたんです。でも私はちやんと知つてゐます。」

　それでば、それは本當なのだ。いよ〳〵時が來たんだ。私は起き上つて、いつもの朝働きにかゝる前にする習慣のやうに、長い間かゝつて顏を洗つた。その間の、妻は私の傍に灯をもつてゐてくれた。それから、私共は灯を部屋の奥に置いて窓際へ行つて街を見下した。

　世は、その時春であつた、花盛りの五月であつた。そして開け放した窓から流れ入る空氣は、此の古びた大きな市街では、それまで決して感じることの出來なかつたやうな淸らかなものであつた。もう數日の間、此の市街の工場と道の上には定まつた仕事といふものがなく、空氣はそれだから煤煙にも埃にも汚れても居ず、淸新な野の草の匂ひと花の盛りの花園の匂ひと、そしてその上におく露の匂ひとに充ちてゐた、市街の郊外を遠く出て行つたのではないかと思ふほどに、その夜の空氣は、快よく珍しく思はれるのであつた。街には灯もなく、砂埃をあげて疾驅する車もなく、がた〳〵した石ころ道の上を行き交ふ不揃ひな跫音もなく、もし目をさへ閉ぢたならば、靜寂な村の中にゐるのではないかと思ふのは私ばかりではないであらう。と、つい近くで犬が吠えるのが聞えた市街の中で犬が呑氣に吠ゐるなどいふ事は、これまでなかなので、私は何だかうれしくて

微笑んだ。

「ほら、犬が吠えてゐるよ」

妻はやさしく私を抱いて、そして言つた。

「すぐそこの、角のところのやうですわ」

私共は、窓枠の上に身を乘り出すやうにして、下を見たそこに、その暗い、けれども透明な闇の底に、何かが、勿論人間ではないやうだけれども、何かゞ動いてゐるのをみたその何物とも知れないものは、まるで影繪のやうにおほろに動いてゐる。

此の時、不意に斧か槌で打つやうな音が響いて來た。妻の言つたのはこれだなと、私は直ぐに思つた。其の音は、靜寂な闇の中に反響して、森の中で木を伐る音が、川の上でボートをこぐ時のやうに、元氣よく、高らかに響いて來るのであつた。私はその響を聞くと、身の内の血が湧き立つやうな、氣がした。元氣な、調和ある働きを欲する喜びにふるへながら、しつかりと妻を抱きしめた、彼女は私の腕の中で、だまつて、市街の家や屋根を見てゐた。それから、もう傾きかけてゐる三ケ月を見上げた。月は細くにほやかにいかにも若々しかつた、丁度夢を見てゐながら、その夢を話すことを恐れてゐる少女のやうに、そして、たゞ輝いてゐるばかりである。

「滿月はいつ頃になるのだらう……」

「いけません、いけません」妻はあはてゝ私を遮つた。

「何にも仰有つてはいけません、こつちへいらつやい。」

部屋の中は暗かつた、私共はしばらくの間だまつて、お互ひに見合ふこともしないで、然し同じ事を考へながら突立つてゐた。しばらくして、私が物を言ひかけやうとすると、それが誰か他の人が話してゐるかと思ふほど、無氣味な氣がした。私は別に恐ろしがつてゐる筈はない、けれども、他の人が話してゐるやうに聞える、その聲は、咽喉の乾きに息がつまりでもしたやうに、ひどやしやがれてゐた

「これからどうなるんだらう？」

「そして子供達は？」

「お前は子供達といつしよに居るだらう、母親さへゐれば子供には澤山なのだ、私は止つてはゐられない。」

「そして私は…？、私だつて出來ません。」

彼女が、これまでは自分の置かれてゐる位置＝妻であり母であることを決して止めやうなどとしなかつた事を私は知つてゐる。けれども今彼女は、それを捨てゝ、遠く、遠く行かうとしてゐるのだといふ事を、私ははつきりとわかつた、急に私は寒くなりだしたので、手を差しのべて妻の手を求めたが、彼女はだまつて、それを傍へそらした。

「人間には、よい日といふものは、ほんの稀にしかめぐつて來ないのに、それさへあなたは私から奪はうとしていらつやるんです、さうでせう、」と妻は言つた。

「併し、あの人たちはお前を殺してしまふだらうよ。そして子供たちもきつと死んぢまふだらうよ。」

「人生つてものが、どんなに私には幸福ものだらう…、あの子供たちさへ死んでしまへば………」

これが彼女の、十年の間僕と一緒にゐて、僕の妻とお互ひに言つてゐた女の口から出た言葉なのだ。昨日まで彼女は子供の事より外は知らなかつた、子供たちについての心遣ひのみで、一ぱいだつたのに、昨日、いや昨晩彼女は自分の未來のおそろしい豫覺の性悔にとらはれてしまつたのだ、それにしても何が彼女の上る起きたのだらうか、昨日とごう云ふ事が、昨日あつたらうか、僕はもう何にも覺ゐてゐないが、

「お前、僕といつしよに行かうと云ふのかい、」

「憤らないで下さい」——僕が彼女のことをおこつてゐると思ふのらしい——「おこらないで下さい、今夜あの人達の斧の音が聞え出した時、あなたはまだ眠りつづけていらつしやいました。其の時僕はすぐあなたの事を思ひましたそして子供たちは皆僕には單に假りのものだ。と云ふ事を不意に感じたのです。………僕はあなたを愛します、ほんとうに、深く〳〵。」妻は手さぐりで僕の手をとり、先刻と同じやうな慣れぬ握り方で、しつかりとつかんで、そして言ひつゞけるのであつた。「けれども、あなたはあの人達がこゝで斧を響かせてゐるのをおききですか、あの人達は打つてゐるんですよ、何かが倒れてゐるやうです。壁みたいなものが、倒れ落ちたやうですわ、何てまあ廣くてのび〳〵と自由な世界でせう、まだ夜中なのにでも、私には太陽が輝いてゐるや遂に思はれます。そして私はもう三十に

もなつてゐるのに、やつと十七の娘のやうな氣がしますわ
誰かこはげしい眞實な初戀でも出來さうですわ。」

「まあ、何といふ夜だらう…」と私は叫んだ。「市街なんかもうなくなつてるやうだ。お前のいふ通りだ、ほんとに私も年齡のことすんぞ忘れてしまつた。」

「あの人達は打ちつゞけてゐます、そうしてあの音をきいてゐると、まるで音樂のやうな、私が一生涯夢のやうにあこがれてゐた歌のやうな氣がします。あそこには自由があります。私の幸福をとり去らないで下さい、あそこで働いてゐる人達こ一緒に死なせて下さい。死んだつてかまひません。あの人達は勇ましく未來を呼んでゐます。深い暗い墓穴のやうな過去から、のがれやうとして必死に努めてゐるんです、どうかあの人達こいつしよに!!!」

「時のやうなものは又とない」

「えゝ！何と仰有いまして？」

「時のやうなものは又とないといつたんだよ、お前は一体誰なんだ、私はお前がわからない、お前はそれで人間なのか。」

彼女は此の言葉を聞くこ、ほんこに十七の娘であるかのやうに高い聲を立てゝ、笑ひくづれた。

「私もあなたがわかりませんわ、あなたも人間こいふんですか？ 何と奇妙なお立派なものでせう、人間といふものは」

ずつと以前にこんな事を書いたここがある――灰色の生活の中に眠りつゞけて、遂に覺めずして死んでゆく人は、此の世に時といふものより偉大なものはないといふ私の言葉を信じないだらうこ――。太陽は昇り、そして又沈む、日時計の針はキチ〳〵と刻んでまはる。けれども一時」というものばかりは目に見ゐない、その『時』の中にこ大きな不思議なことどもが起りはするけれど……。灰色の世界に眠つてゐて、遂に目覺める事なしに死ぬ人々は、今もやはり私の言ふ事を信じないのだらう。

「私は出かけなくちやならない。」と私は言つた。

「お待ちなさい、何か召し上るものをあげませう、あなたは今夜まだ何にも召し上つてゐないんですから。御覧なさい、私がどんなに賢いか、明日になれば私は出てゆきます

子供達を置いてあなたの所へゆきますね」
「カムレート」
「おゝ、カムレート」
　戸を閉めずにある窓からは、野の息吹が流れ込んで來たそして靜かな間をおいては、斧を打つ元氣な音が聞ゐて來る。私は卓子の傍に腰かけて、　闇の中の、私の身のまはりのものを見入り、やみの中に響く物音に聞きとれた。すると、すべてのものが、私には微笑みたくなるほどに、物珍らしく、神秘的に見ゐるのであつた。私はあの壁がどうして建てられたか、あの人達が、今どうして其の壁を破壞してゐるか、長い間のことが、皆と電のやうに頭の中を過ぎていつた。自分ばかりはこれまでも存在した、そしてこれから後も存在するであらう。何でも皆過ぎてゆく、唯私ばかりは變ることとなく殘るであらう。その邊にある物皆が私には不思議に奇妙に不自然に見える、卓子、その上にあるパン、私を取り卷く何もかも、透明で輕くて、假りに存在してゐるのではないのだらうか？
「何故召し上らないの？」と妻は不思議さうに訊いた。

私ばたゞ微笑んだ。
「パン、妙なものだね」
　彼女はパンを、古くなつてかさ〳〵に輕いたパンの皮を皆と見た、私の言つたことはわからなかつたらしいが、其の時彼女の顏には何かのために、悲しげな色が浮んだ。パンの上に目を落してゐるやうにしながら、彼女はゆる〳〵とエプロンをとゝのへて、少しづゝ、少しづゝ、子供達の眠つてゐる方に顏をむけるのであつた。彼女の顏に浮いた悲しい色の、その因を私は了解した。
「お前は、子供たちのことをかはいさうに思ふのかい？」と私は訊ねた。彼女はやはり目を下に向けたまゝ、頭を横に振つた。
「いゝゑ、私これまでの私共の生活に起つたことを考へてゐるんですわ」
　彼女は目をあけた。部屋の中をキョロ〳〵と見廻した。長い長い眠りからさめた人のやうに、すると何もかも彼女には珍らしく、事改つたやうに見えるのであつた、これが自分達が長い間住んでゐた所なのだらうか？

「お前は私の妻だつたんだよ」
「……………」
「そして子供がゐるんだよ」
「こゝで、この壁の向ふの部屋で、あなたのお父さんは息をお引取りでした。」
「さうだ、親爺は死んだのだ、親爺はとう／＼目覺めないで死んぢまつた」
丁度此の時、また赤ン坊の末の子が、夢の中で何かに驚ろかされたと見えて、不意に鋭い泣聲を立てた。その一本調子な疳高い泣聲は、親である私共に何かを催促するやうに、灰色の、色々の幻想をおこさせる壁の中から、現實にかへれといふやうにひゞくのである――。下の街では何かの壁が倒れ、新しい防塞が築かれてゐる時に――
子供は、あやしてすかしてくれと催促するやうに泣きつづける。やがて母親にあやされて靜かになつた。
「さあ、お出かけなさい」と、妻は囁くやう私にに言つた
「子供達にキッスをしてゆきたいんだが」
「だつて、あなたは目をさまさせるからいけません」
「いや、大丈夫だ」
私共の話聲はそんなに高くはなかつたけれども、けれどもそのために一番上の子供の目をさましてしまつた。彼は私共の言つてることを聞いて、そしてすべてを理解した彼はまだ九つにしかなつてゐないけれども、皆わかつてしまつたのだといふことは、私が其の部屋へ入つていつた時きつい、如何にも思深げな目で私を迎へたのでわかつた。
「鐵砲をもつてゆくの？」
「あゝ」
「ストーヴの後にありますよ」
「どうしてお前そんなことを知つてゐるの？さ、お父さんにキッスをおし、お前お父さんを忘れないでゐてくれるかい？」
彼は暖い床の中から飛び起きて、身を屈めてゐる私の頭にしがみついた。袖の短いシャツから出てゐる彼の腕は、燃えるやうにあつく、細くやはらかくて、デリケートであつた。私は彼の後頭に垂れて居る髮の毛をかきあげて、小さな頂にキッスをしてやつた。その時彼は私の耳に唇をよ

せて、
「お父さんは殺されやしない?」と、小聲で、けれも確かな調子で囁いた。
「いゝね、歸つて來るよ」
私も亦彼にさゝやきを返して、そして子供たちの部屋を出た。
然し、あの子は何故泣かないのだら?
暫らくの間私が留守にして、すぐに歸つて來るとわかつて居る時でも、私が出かけるといふと、よく泣いたものだ。あんな子供にまでこの頃の「事件」が影響するとは、有り得ることであらかう?様々のことが、この日頃には起つたものである。
私は改めて部屋の中にあるものを見た。灰色の壁を見たパンを見た、燭臺をみた、まだ微かに明滅しかけて居るその焔をみた。そして妻の手をとつて、靜かに力をこめて握りながらいつた。
「では、又あふまで」
「えゝ、又あひますまで」
それだけであつた。それが終りであつた。私は階上の自分の住居を出ていつた。階段は暗くて古くなつた不潔なものゝ匂ひが、その邊に漂ふて居た。石壁とやみとに包まれて居る。階段を私は手さぐりでおりていつた、そしてその時、私の心は、今その中へ私が突き進んでゆかうとして居る。未知の新しい喜ばしいものゝ、强い權威ある誘ひにとらはれて居るのであつた——

大正十三年十一月二十二日第三種郵便物認可
大正十五年六月二十七日印刷納本
大正十五年七月一日發行（毎月一回一日發行）

婦人運動

第四卷
第六號

【定價二十三錢】